

多賀城市からのお知らせ

送付枚数（送り状含む） 4枚

桜井館跡第3次調査遺跡見学会の開催について

平成25年8月8日

多賀城市総務部地域コミュニティ課

広報広聴係

☎368-1141 内線255

平成25年5月9日～10月末の予定で発掘調査を実施している桜井館跡第3次調査について、中世の遺構の概要がまとまりました。この成果を市民はじめ多くの方々に公開するため、下記の日程で遺跡見学会を開催します。

記

開催期間：報道発表（報道機関対象） 平成25年8月21日（水）

午前10時30分～

遺跡見学会（一般市民対象）平成25年8月23日（金）

午前10時30分～

午後2時～

平成25年8月24日（土）

午前10時30分～

午後2時～

※合計4回開催、雨天の場合は中止。

開催場所：多賀城市中央一丁目104-1（別紙 遺跡見学会会場位置図参照）

調査成果：土塁、空堀（堀切）、平場から構成される中世の城館跡を調査しました。この館跡は留守氏の家臣に関わる城館と推察されます。

詳細については、桜井館跡第3次発掘調査報道発表資料参照

■このことについての問い合わせは・・・

多賀城市埋蔵文化財調査センター

☎368-0134

担当：相澤 清利 石川 俊英



遺跡見学会会場位置図

桜井館跡第3次発掘調査報道発表資料

- 中世城館の調査 -

平成 25 年 8 月 21 日 (水) 10 : 30 ~

調査要項

遺跡名 桜井館跡 (さくらいたてあと)
所在地 多賀城市中央一丁目 104-1
調査面積 約 2,000 ㎡
調査期間 平成 25 年 5 月 9 日 ~ 10 月末
調査原因 宅地造成
調査主体 多賀城市教育委員会
調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター
調査協力 株式会社 大雄産業、澤木工務店

遺跡見学会のお知らせ

平成 25 年 8 月 23 日 (金) 午前 10 時 30 分 ~
午後 2 時 ~
平成 25 年 8 月 24 日 (土) 午前 10 時 30 分 ~
午後 2 時 ~
※合計 4 回開催。雨天の場合は中止。

連絡先 多賀城市埋蔵文化財調査センター
担当 相澤、石川
電話 022-368-0134 080-1661-1981

1 はじめに

本館跡は多賀城市役所の西側に位置し、東西約 150m、南北約 120m の舌状に張り出した小独立丘陵の突端部 (標高約 18m) に所在します。多賀城市内の中世城館跡は、現在 15 ヶ所 (多賀城跡の作賀地区など) が知られていますが、これらの大部分は破壊が著しく、遺構の不明瞭なものが多いようです。その中で本館跡は、丘陵南側が宅地造成によって削り取られているものの、北側は山林となっていたため大きな地形改変を受けずに現在に至っています。現況でも土塁と空堀が確認されることから市内でも希少な遺跡と言えるでしょう。安永 3 年 (1774 年) の「風土記御用書出」留ヶ谷村の項には、

- 一古館 二
一 野田 一屋はさか館 竪四十間 横廿五間
一 当郡田中村御境桜井館 竪三十間 横十五間 ※約 54m x 約 27m
右二館共誰御居館と申儀並年月共相知不申候事

との記載があり、江戸時代の中頃には誰の居館だったのがはわからないが、村人の間では古い城館として認識されていたようです。

多賀城町誌では、本館跡について留守家臣黒川氏のもとと推測しています。しかしながら、この館跡については、その歴史的背景は謎に包まれており、今回の発掘調査によってその一端が解明されるものと期待されました。



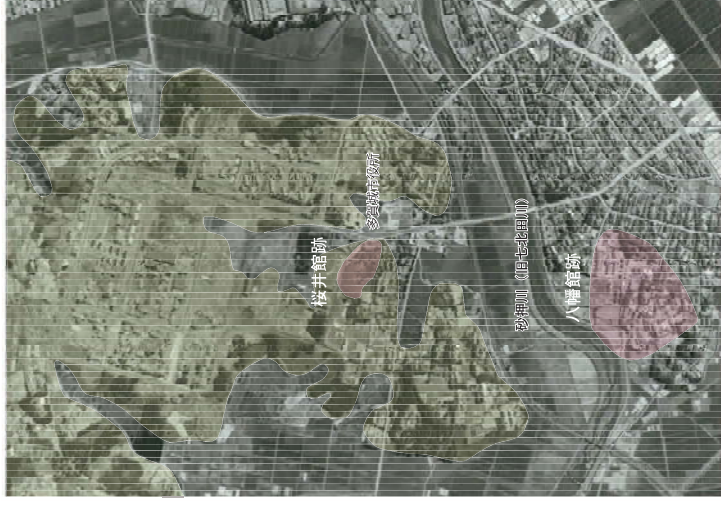
中央の林のところが桜井館跡 (仙台方面を望む)



発見した土塁 (東より)



第 1 図 桜井館跡位置図 (昭和 39 年作成)



桜井館跡周辺の空撮写真 (昭和 36 年撮影)

2 調査成果

今回の調査では、土塁、空堀（堀切）各1条、平場2ヶ所を発見しました。（第2図）

土塁は南北方向に19m以上、その北端では鉤型に屈曲して北斜面の落ち際に東西方向に約20m延びていくことがわかりました。さらにその東側は平坦面ですが、約20mにわたって積土が確認されました。規模は南北方向で上幅約1.5m、基底部の幅は約5.3mで、高さは約1mです。東西方向では平面の大きさは南北方向のものとほぼ変わりませんが、高さが一段低くなります。南北方向の土塁は、旧表土（黒褐色土）の面に空堀を掘削した土砂を積み上げて構築しています。

空堀（堀切）は土塁の西側に沿って南北方向に延びており約35mまで確認しました。規模は上幅約6.5m、下幅約1.7m、断面形は船底形です。土塁頂部と堀底面の高低差は約2.5mもありました。

平場Ⅰは、西側を土塁、空堀で区切られた東西約50m、南北20m以上の広さです。平場Ⅱは、土塁のコーナー付近の北斜面に造られた郭輪で、東西約15m、南北約6mの小規模なものです。平場においては、館跡に伴う遺構・遺物は発見できませんでした。

今回の調査で出土した遺物は、古墳時代後期～古代のもので、これからの旧表土下の調査でこの時期の遺構の発見が期待されます。

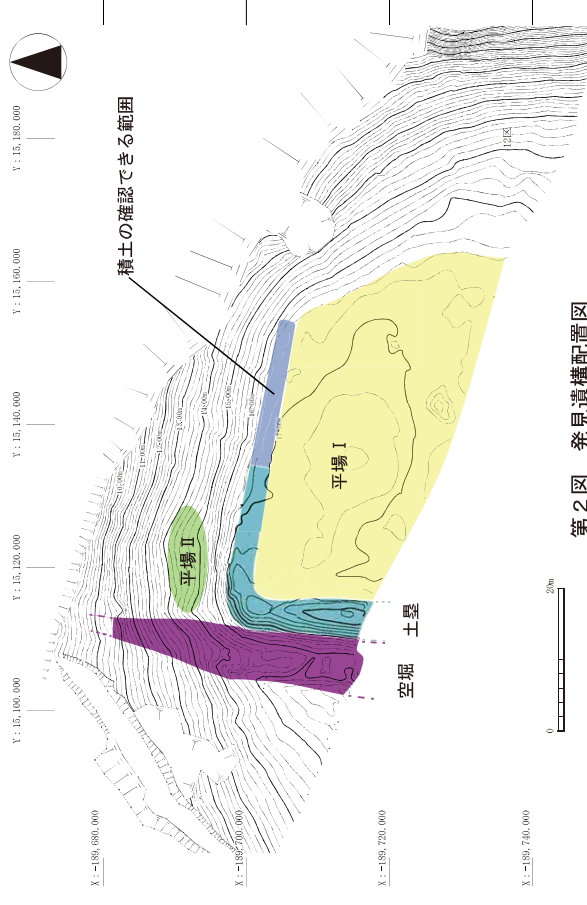
3 まとめ

今回の調査では、出土遺物から直接遺構の年代を推定することは難しいのですが、本館跡は、土塁、空堀等の築城方法から判断すると中世の城館と考えられます。館跡の立地する小丘陵は、南に延びる舌状台地の東端にあり、空堀（堀切）は尾根を切断するように造られていました。このような施設は防御的な役割を果たすとされています。また、平場では建物跡など居住に関連する遺構が全く発見されなかったことから、日常的に人々が暮らす場ではなかったこともわかります。このようなことからすると、周辺を監視する場や有事に備えた場などに使われたとも考えられます。

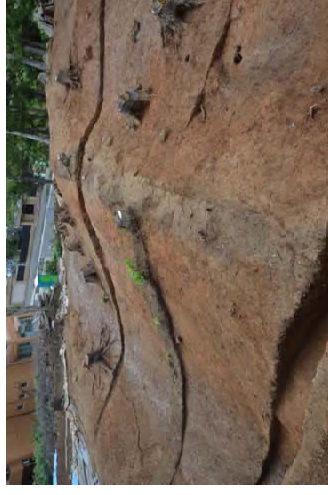
一方、文献資料によると、江戸時代中頃には「風土記御用書出」に記されているように伝承として桜井館跡のことが人々の間に伝わっていたようです。

中世（おもに鎌倉・室町時代）における多賀城市域は、おおむね旧七北田川（新田地区の南側を東流し砂押川と合流していた）を境として、北側に留守氏、南側に八幡氏の所領があったとされています。本館跡は旧七北田川をはさんで八幡氏の居館である「八幡館」に近接する位置関係にあります。室町幕府成立時には、八幡氏と留守氏の間でも抗争がありました。その後、八幡氏は留守氏に服属し家臣となります。このような地理的環境・歴史的背景のなかで本館跡の位置づけがなされるものと思われま。

また、当時の留守氏の家臣団編成を伝える「留守分限帳」（天文17年：1548年に作成）には、さくらい（桜井）の名字がみられます。このことから、本館跡との関連が考えられますが、詳細については不明です。



第2図 発見遺構配置図



土塁と空堀（南より）



土塁と空堀（北より）



空堀の調査の様子



土塁の積土状況